

日産プレジデント基金

～被災地の子どもたちに笑顔を～

NISSAN PRESIDENT FUND
BRINGING BACK CHEERS AND SMILES OF CHILDREN





ごあいさつ



2011年3月11日に発生した東日本大震災は瞬時に世界中に大きく報じられ、世界各地から支援の手が差し伸べられました。私自身もたびたび現地を訪れる中でその被害規模に衝撃を受け、何か自分にできる支援をと考えました。そこで、社外の友人に呼びかけて寄付を募り、発足したのが「日産プレジデント基金」です。

この基金をどう活用するか検討する過程で、より多くの社会的援助を必要とする方々、とりわけ震災でとくに大きな影響を受けたであろう子どもたちを支援したいと考えようになりました。さらに「可能であれば子どもたちに直接支援の手が届く活動に役立てたい」と考え、専門知識やネットワークをお持ちのパートナーを探す中で、日本NPOセンターさんのお力を借りることができました。

「あそびプラスOneプログラム」と「おでかけプログラム」は、子どもたちが遊びを通して元気と笑顔を取り戻すことを目指したプログラムです。日常生活の基盤が崩壊した被災地においては、暮らしを立て直すことが最優先課題であり、子どもたちにとって本来もっとも身近で当たり前の行為である「あそび」が、十分にできない状況が多々あると聞きました。このプログラムを通じて子どもたちが屋内外で思いきり遊び、子どもらしい喜びに満ちた生活を取り戻すための一助になればと心から願っています。

最後になりましたが、すばらしいプログラムを開発し、関係機関との綿密な連携のもと、多くの子どもたちに届けてくださった日本NPOセンターさんをはじめ、すべての関係者の皆さまの熱意と実行力に心より敬服し、御礼を申し上げます。



カルロス・ゴーン

日産自動車株式会社 社長兼最高経営責任者





日産プレジデント基金

～被災地の子どもたちに笑顔を～

概要・趣旨



本基金は、日産自動車株式会社社長カルロス・ゴーン氏が
発起人となって募った寄付金を活用し、
東日本大震災で被災した子どもたちの
笑顔を取り戻すためのプログラムを、
認定特定非営利活動法人 日本NPOセンターが多分野の
NPO、児童館、学童保育と連携し、実施するものです。
期間は2011年7月末～2012年9月末で、
岩手県、宮城県、福島県の児童館、学童保育を対象に
「あそびプラスOneプログラム」と「おでかけプログラム」の
2種類のプログラムを実施しました。

(1) あそびプラスOneプログラム

子どもたちの日常的な遊びの拠点である児童館に、多様な専門性を持った県内外のNPOが訪問してプログラムを提供するものです。

日常的な子どもたちの拠点である児童館は、震災以降、施設が被災して使えなくなったり、子どもたちの利用が増えるなど、スタッフの業務は多忙になり疲弊している面もありました。NPOが新規のプログラムを提供することにより、子どもたちだけでなくスタッフにも元気になってもらいたいと考えました。

(2) おでかけプログラム

被災してから、自由に外で遊ぶことが制限されたり、フィールドに出る機会が激減している子どもたちに、長期の休暇を活用して、フィールドに出かけて、さまざまな学習や体験、あそびを通じて、元気に過ごせる時間を提供するものです。

プログラムの実施にあたっては以下の3点を重視しました。

- 1 被災後の子どもたちの安心・安全を確保しつつ、子どもたちの伸びやかな時間を確保すること
- 2 被災地で子どもの支援に取り組む組織やスタッフの元気を取り戻すプログラムにすること
- 3 県内、県外の被災地支援をしたい団体と地域の子どもをつなげること

あそびプラスOne プログラム



子どもたちが暮らす地域の児童館や学童保育に NPOがあそびを提供するプログラム

●プログラムの目的

児童館がNPOと連携してプログラムを提供することにより、子どもたちは今までになかったプログラムを体験し、スタッフには子どもたちとともに過ごす時間を持ってもらうことで、子どもにもスタッフにも元気になってもらうための時間を提供する。

●プログラムの背景

勉強の場である学校、生活の場である家庭と並んで、子どもの遊びの拠点である児童館の支援をすることで、直接的な被災や仮設住宅の建設などで遊び場をなくしている子どもたちが、気兼ねなく遊べる場所を創出しています。児童館は震災以降、拠点施設の被災、マンパワーの不足などで子どもの居場所としての機能を低下させていました。児童館・学童保育スタッフも、被災以降、子どもたちの遊び場が減る一方で利用者が増えたことで、業務が多忙になり疲弊していました。そこで、児童館や学童保育の支援を専門としている児童健全育成推進財団と連携して、信頼できるNPOの専門性のあるプログラムをメニュー化し、児童館の希望に合わせて紹介。NPOのプログラム準備・実施にかかる経費を本基金から賄うことで児童館の人的・金銭的な負担のない形で提供をしました。

●実施体制



日本NPOセンター：協力NPOの募集、経費精算・管理
児童健全育成推進財団：児童館の募集、NPOと児童館の間のプログラム調整、計画・報告の回収
児童館：プログラムへの応募、NPOとのプログラム調整、広報、受入準備
協力NPO：プログラムへの応募、児童館とのプログラム調整、プログラム準備・実施、予算・決算報告

●プログラムの特徴

本基金が始まる前の被災直後は、外部からの支援が殺到し、中にはトラブルを起こす団体も散見されたために、外部からの支援が負担になっている面もみられました。本プログラムは児童健全育成推進財団が児童館とNPOの間に入り、丁寧な対話を行なうことで、有効な支援となることを目指しました。

期間中に21団体が100プログラムを提供しました。



あそびプラスOneプログラム
座談会

「あそびプラスOneプログラム」の実施に協力いただいた関係者に集まっていた
だき、どのようなプログラムだったのか、語り合ってもらいました。

お集まりいただいたのは、プログラムを受け入れる児童館から、仙台市東四郎丸
児童館の館長で、宮城県児童館連絡協議会会長でもある小岩孝子さん、被災地に
拠点を置いて活動しているアートリバイバルコネクション東北（あるくと）の千田優太
さん、被災地外の団体として支援を続けている日本国際ワークキャンプセンター
（NICE）事務局長の上田英司さん。そして、プログラムにおいて児童館とNPOのコー
ディネートを行ない、両者の事情を良く知る児童健全育成推進財団の阿南健太郎さ
んに司会をしていただきました。



—児童館にとって「あそびプラスOne」はいかがでしたか？

小岩 話をいただいた時、何でもいいと言われたのが嬉しかったです。決まったものの中から選ぶというものは他にもありましたが、コーディネートしてくれるのが良かったです。宮城県児童館連絡協議会の理事会で広報したので、プログラムを実施した児童館から終了後に電話や手紙で、子どもたちのためにも、自分たちのためにもすごく良かったとの報告をたくさんもらいました。

—NPOにとってはいかがでしたか。

千田 「あるくと」は宮城の舞台表現者が震災後に何かでき

ることはないかと集まった集団です。震災で失った表現の場を取り戻すことと並行して、自分たちが役立つ場として出前活動を行ないました。出前活動は、当初、避難所で体を動かすものが中心で、その後は児童館や学校の要望にあわせています。現在は文化庁の芸術家派遣事業としても活動しています。ただ、これらの活動は、宮城県や仙台市に限られています。「あそびプラスOne」で県外の児童館に行けたことは大きいです。仙台市内は通常に戻りつつありましたが、福島県では子どもたちは未だに外で遊べない状況でした。線量計が至る所に設置されており、高い値を示しています。そこに行って、そこで暮らす人たちと話をすることで、震災はまだ続いていることを実感しました。



—「あるくと」が行なったプログラムはどのようなものだったのですか。

千田 福島県須賀川市立うつみね児童館からは、児童館の看板を子どもたちと一緒に作りたい、との依頼がありました。東京在住の舞台美術家、大沢佐智子さんに手を挙げてもらい、一緒に打合せに行きました。児童館や子どもたちの様子を見て、希望を伺い、子どもたち一人ひとりが自分なりのオブジェをつかって、それを組み合わせて、大きなパネルに貼り付け、小枝で文字をつかって看板を完成させることにしました。

—子どもたちの反応はどうでしたか。

千田 子どもたちは全身絵の具まみれでパネルに色を塗ったことが楽しかったようです。「あるくと」では、本番を成功させるため、事前の打ち合わせを大事にしています。大沢さんは、実施前に2回児童館を訪ね、子どもたちと一緒に遊んでいたの、顔を知っている人が実施するプログラムとして歓迎されました。

—福島のもう1カ所では、演劇と制作のコラボを実施されたのですよね。

千田 オリジナルの演劇『おぼろ月 竜の嫁』を上演しました。劇を見た後で、一人ひとりがイメージする竜の絵を描き、2つのグループに分かれて話し合いながら、竜を制作しました。子どもたちが普段使ったことのないような大掛かりな道具も持ちこみました。県外から入る団体としては、距離が離れていることを考慮し、何を児童館に残して

いくのかを考えながらプログラムをつくりました。児童館で続けられるように、現地で手に入るものを使い、スタッフの方々に方法をお伝えするようにしています。

—児童館に関わった感想を教えてください。

千田 うつみね児童館からは、その後、児童館のまつりへお誘いいただき、行ってきました。来年度も何う予定ですし、今後も継続していきたいと考えています。

私が見てきた児童館が行なっている活動は自由で、そのこと自体がアートの活動でした。アーティストが児童館の職員とどう交流できるかということが、子どもたちに提供できる活動の向上につながるのではないかと思います。協働や合同の勉強会などによってお互いを高めていけるといいと思います。

—NICEが「あそびプラスOne」で行なった具体的な活動を教えてください。

上田 NICEは国際ワークキャンプをする団体で、世界中からボランティアが集まって2～3週間地域に滞在しながら地域に根差した活動をしています。合宿型ボランティア活動が特徴の1つで、全国50カ所で活動してきました。世界の人々が集まっているので、外国人ボランティアによる世界のあそび紹介のプログラムを届けたいと考えました。

「あそびプラスOne」として、8月上旬に岩手、8月下旬に福島、9月上旬に宮城で、海外のメンバーと一緒に遊ぶ活動をしました。メンバーによってあそびは多様です。たとえば、岩手の時には、独仏露、中国、台湾、香港からのメンバーだったので、世界6大陸をまわるスタンプラリーを行ないました。





ました。それ以来、子どもたちは「チーム東中田っ子」として活動を継続してきました。震災後1年が経とうとしていた時、「怖かったよね。(あの日の1日前) 3.10に楽しいことを企画したい。」という話が子どもたちから出てきました。震災後、子どもたちは炊き出しやお年寄りへの弁当の配達、支援物資の運搬などを行なう中で、「笑顔が足りない」と感じていたようです。元気が出るあそびをしたい、東北全体が元気になるように願いを込めて風船を飛ばしたいと、子どもたちがアイデアを出し合い、それを実現させたのです。

—どのようなことを意識して進められましたか。

上田 NICEは東北以外の団体なので、事前ヒアリングで、児童館のこれまでの活動や子どもたちの構成、期待、達成したいことなどを確認してから、どのようなあそびを行なうか決めていきます。その中で感じたことは、児童館が日常の取り組みを大事にしているということです。本来の児童館の活動の延長線上にプログラムがあることを大切にすべきと考えました。少なくとも2時間前に現場入りして、リハーサルを行ない、児童館のスタッフに確認してもらいながらプログラムを修正しました。また、東北以外の多くの人たちが被災地に関わるようコーディネートし、機会を提供していくことも大事です。そのため、ボランティアのオリエンテーションと振り返りをしっかり行ないました。

—東四郎丸児童館では、子どもたち自身が企画したと聞きましたが本当ですか。

小岩 日本NPOセンターが実施している「子どものための児童館とNPOの協働事業」のモデル事業として、2007年に子どもが企画して大人が応援する事業を行ない



—子どもたちは、自分たちで考えたことを実現してきた経験から、震災時にも自分たちができることを考えてくれたのでしょうか。

小岩 その通りです。子どもたちは何をしなければいけないか、大人よりしっかり把握しているものです。

—「あそびプラスOne」では原則1ヵ所1回となっていますが、児童館として継続してほしいという気持ちは強いですか？

小岩 ケースバイケースだと思います。被害が大きかった地域の児童館は、来てもらえるのは有難いが、1回だけ来て好きなことをやって帰られるのには、もう耐えられないとおっしゃっていました。丁寧に関わっていただければ、それは単なる1回ではなくなります。何度もコンタクトをとり、児童館のことを考えて対応していただければ、1回の活動でいただいた財産を活用して、そこから自分たちなりにつなげて発展させていくこともできます。

—NPOにとってはいかがですか。

千田 1ヵ所に1回しか行けないのは残念です。せっかく会えた子どもたちともう一度会いたいですし、積み重ねによっていいものになっていくことを、さまざまな活動で実感しています。

—被災地支援を継続する上で課題になっていることはありますか？

千田 震災直後は、何もできないことの無力感を感じました。私たちにも何かできることがあるはずと考えて集まっ



たので、ニーズにあわせてプログラムをカスタマイズすることに抵抗はありません。ただ、表現の場が戻ってきて本業が忙しくなっています。表現活動と出前活動、どちらも100%というわけにはいかないので、それぞれがどう選んでいくか、という課題があります。

—外から長く支援し続けることの難しさはありますか？

上田 ボランティアに対してネガティブな経験のある地域では、自分たちのことは自分たちでやるので、ボランティアはいらないといった声を聞きます。その時に、果たして素直に引き上げてしまっているのか、葛藤があります。私も過疎地域の出身なのでわかるのですが、過疎という課題を抱えている地域には人の対流があって、そこを第二の故郷と言ってくれる人が増えてくるのが大事です。1回のボランティアが継続につながるには、きちんとしたマッチングとコーディネーションが求められます。NICEの通常のワークキャンプは、地域主体で企画をたて、地域が宿泊や食事を提供して、ボランティアが労力を提供しています。東日本大震災の被災地では、その形を求めることはまだ困難ですが、過渡期に来ている気がします。

—NPO側の努力とあわせて、受入側の体制も整えていくといいですね。被害が大きかった地域は、まだ希望が挙がっていない児童館もあります。何かアドバイスはありますか？

小岩 被災地の状況によって、いつ受け入れられるかというのは異なると思います。まだまだコミュニティがきちんと機能していない地域もあります。児童館の歩みにあわせてプログラムをうまく提供することができれば、子どもたちの生きる力につながると思います。また、NPOに対する理解や反応はさまざまなので、プログラムを提供しているNPOが丁寧に対応していることを伝えることも必要です。

—みなさんのお話を伺い、児童館や子どもたちがやりたいことにあわせてプログラムを組み立てて実施していく姿勢の大切さを改めて痛感しました。また、児童館が地域の資源を活用して継続できるような財産を残していくという視点も大事です。趣旨や児童館について、きちんと伝えた上でNPOに関わってもらうことが大切ですね。今日は、ありがとうございました。

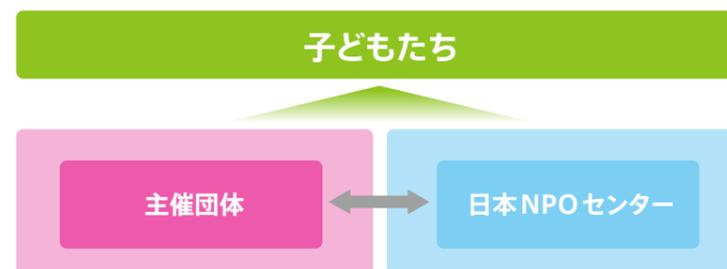
おでかけ プログラム

子どもたちが県外に出かけ、キャンプなど 宿泊をしながら遊ぶことを応援するプログラム

●プログラムの目的

被災してから、多くの子どもたちが自由に外で遊ぶことが制限されたり、フィールドに出る機会が激減。こうした状況に対して夏休みなど長期の休暇を活用して、子どもたちがフィールドにでかけて、さまざまな学習や体験、あそびを通じて元気に過ごせる時間を提供する。

●実施体制



日本NPOセンター：保養プログラムの選定、主催者からの相談対応、運営サポート
主催団体：保養プログラムの企画、広報、プログラム準備・運営実施

●プログラムの特徴

心身の健全な発展に外で自由に遊ぶ時間が欠かせません。短時間であってもそういう場を子どもたちに提供すること、また親御さんが安心してお子さんを送り出してもらえることを目指し、主催団体の企画プログラムに日本NPOセンターが運営協力をしました。

●実施一覧

No.	団体名	事業名	実施日	参加者数	参加者内子ども	行先
1	特定非営利活動法人 子どもアミーゴ西東京	いわき市の子どもたちに すてきな夏を!	2011年 8月17日~ 8月19日	50	45	東京ディズニーランド、 ひばりが丘児童センター
2	財団法人 札幌市青少年女性活動協会	福島県児童生徒対象受け入れ リフレッシュ・サマーキャンプ	2011年 8月16日~ 8月28日	85	85	札幌市滝野自然学園、 定山溪ほか
3	新潟県立大学植木研究室	南相馬市児童のための 冬休み支援プログラム	2011年 12月26日~ 12月28日	105	75	新潟県立こども自然王国
4	特定非営利活動法人 子どもアミーゴ西東京	いわき市の子どもたちに笑顔を! 第2弾	2011年 1月7日~ 1月9日	56	45	東京ディズニーランド、 ひばりが丘児童センター
5	特定非営利活動法人 子どもアミーゴ西東京	いわき市の子どもたちに笑顔を! 第3弾	2011年 1月6日~ 1月7日	48	43	高尾の森わくわくビレッジ、 ひばりが丘児童センター
6	東日本大震災 市民支援ネットワーク・札幌 (むすびば)	被災者支援事業「札幌で冬休み」	2011年 12月23日~ 12月31日	22	16	ニセコスキー場、円山動物園
7	新潟県立大学植木研究室	春休み子ども支援プログラム 「再会そして再開」	2012年 3月28日~ 3月29日	220	200	万葉ふれあいセンター、 東北電力名取スポーツパーク
8	財団法人 札幌市青少年女性活動協会	福島県児童生徒対象受け入れ リフレッシュ・キャンプ	2012年 3月23日~ 3月31日	40	40	札幌市滝野自然学園ほか
9	特定非営利活動法人 ホールアース自然学校	福島を元気にする子どもキャンプ IN 富士山	2012年 3月30日~ 4月2日	35	30	富士山 YMCA、富士山
10	東日本大震災 市民支援ネットワーク・札幌 (むすびば)	学習支援付き保養プログラム in 北海道	2012年 7月30日~ 8月19日	35	25	札幌市およびその周辺
11	行くじゃん遊ぶじゃん 保養キャンプ in 山梨 実行委員会	行くじゃん遊ぶじゃん 保養キャンプ in 山梨	2012年 7月30日~ 8月3日	16	14	山梨県愛宕山少年自然の家ほか
12	やまなし保養キャンプ 実行委員会	やまなし南アルプスふもと キャンプ	2012年 8月16日~ 8月20日	13	8	五風十雨農場
13	福島ハーメルン・プロジェクト ジョイントチーム	福島からくる親子のための 夏休み最後のキャンプ	2012年 8月20日~ 8月24日	28	18	豊岡市日高町オートキャンプ場
14	特定非営利活動法人 市民未来共社	日開谷川流域こどもユートピア (田んぼで運動会)	2012年 9月22日	39	19	徳島県阿波市市場町日開谷地区



おでかけプログラム
事例紹介

「おでかけプログラム」の主催団体には、大きく分けて2つの傾向がありました。1つは、震災前から子どもを支援する活動をしてきた、経験も専門性も持つ団体が主催団体となる事例。その1つとして「子どもアミーゴ西東京」からお話を伺いました。

もう1つが、県外避難してきた被災者自身が関わるグループが、経験や専門性がある人たちを巻き込みながらプログラムを実施する事例。その中から、「行くじゃん遊ぶじゃん保養キャンプin山梨」実行委員会をご紹介します。

事例
1

子どもアミーゴ西東京

子どもアミーゴ西東京は「子どもは地域ぐるみで育てていこう」というモットーのもと、学童クラブの保護者が中心となって立ち上げたNPO。西東京市内の学童クラブ6ヵ所と児童センター1ヵ所を市から受託運営しています。福島県いわき市の学童クラブを受け入れる「おでかけプログラム」を3回実施しました。インタビューでは、事務局長の小松真弓さん、担当者の佐藤文俊さんにお話を伺いました。



ともに、スタッフの負担も増えます。また、知らない誰かに預けるのではなく、普段から一緒に過ごしている指導員が同行することで、親も安心して送り出せたようです。

—当時の四倉児童クラブはどのような様子でしたか？

佐藤 四倉児童クラブは拠点が被災したので、公民館などを転々としていました。私が打合せを兼ねて訪問した時は、公民館の20畳程度の一室に40人ぐらいの子どもたちがいて、体を動かすこともできずに座っていました。この状況で子どもたちの生活が保障されていると言えるのかと思いました。しかも、それがいつまで続くのかわか

らない。公民館には他に空き部屋もありましたが、みんなでない不安なようで寄り添うようにじっと座っており、トラックが通る音や振動にも反応していました。その様子を見て、少しの間でもいいから思いっきり体を動かしてもらいたい、遊ばせてあげたいと思いました。

—2011年夏の第1弾の具体的な活動について教えてください。

佐藤 まずは何をしたいか、子どもたちに聞いてもらいました。海がある地域の子どものため「泳ぎたい」という声が圧倒的でした。そこでプールがある東京スポーツ文化館に泊ることにして1日目はプール遊び、2日目は東京ディズニーランドで遊ぶことにしました。最終日は、ひばりが丘児童センターで地元の子どものための交流会をしました。

—いわき市の学童クラブを受け入れたきっかけを教えてください。

佐藤 当会の高橋ヨシエ理事は、全国学童保育連絡協議会で学童保育の指導員を教える立場にあります。震災後、協議会から高橋理事に被災地の学童クラブの指導員のメンタルケアをして欲しいとの依頼があり、6月に最初に訪問したのがいわき市でした。訪問のあとすぐに高橋理事から報告を受け、我々に何ができるかを考えました。その後、特に被害が大きかった地域をまわり、遠くに子どもたちを出すことに、親も指導員も乗り気になってくれた四倉児童クラブを最初に受け入れることにしました。

財政的な裏付けがない中で企画を進めたので、日産プレジデント基金の支援は助かりました。特に四倉児童クラブに全員参加のオファーができたことに価値があります。一部だけを招待すると、行ける子、行けない子に差が出ると

—四倉の子どもたちの様子はいかがでしたか。

佐藤 とにかくプールを楽しみにしていて、2時間思いっきり泳いでいました。夕食の後も暗くなるまで芝生の上で“はないちもんめ”などの外遊びをして、お風呂も大はしゃぎでした。

小松 ディズニーランドでも、時間があると子どもたちは走り回って追いかけて遊んでいました。私は5年生の女の子と一緒にいましたが、彼女たちは自分たちが翻弄されていることを理解しており、「いつまで今の場所にいられるかわからない」「どうせまた移動するよ」と大人びた会話をしていました。ひばりが丘児童センターの鏡張りのダンスルームで、両手を広げてグルグルまわって遊んでいたときに「うらやましい、ずるいなあ、何で私たちだけ…」とふっと漏らしたことが心に残っています。嫌な思いを口に出す、弱音を吐いてもいいと伝えました。

—2012年1月の2回目のときはいかがでしたか？

佐藤 2回目は拠点も落ち着いていたので、心の安定が見られたような気がします。子どもも大人も久しぶりの再会に大喜びでした。

—久之浜児童クラブを受け入れることになったのはどんな経緯ですか。

佐藤 いわき市の視察時に特に状況の悪い施設の一つであったことと、同じ市内なので指導員間の交流もありました。久之浜もしばらく建物が使えず、知り合いの不動産屋に一軒家を借りて活動を再開していました。40人の子どもたちが過ごすにはスペースや使える時間が限られており、庭木があるのですが放射線量が高く外で遊ぶこともできずにいました。やはり思いっきり外で遊んでもらいたいと思い、プログラムを組みました。



—その後、交流は続いているのですか。

佐藤 2011年夏以来、子どもアミーゴ西東京といわきの子どもたち、指導員はことあるごとに行き来して、交流が続いています。2012年5月には、会津坂下町で久之浜児童クラブの子どもたちに農業体験をしてもらうという県内支援をつなぎ、スタッフが手伝いに行きました。また、子どもアミーゴ西東京では、毎年9月に「だがしや楽校」というイベントをして、子どもも大人も模擬店を行なっています。そこにも、四倉児童クラブの子どもたちが指導員と一緒に、いわきの特産品などを出店してくれました。文通をしている子どもたちもいます。

—子どもアミーゴ西東京の子どもやスタッフにとってどんな影響がありましたか。

小松 西東京の子どもたちは震災を忘れていません。顔を見て話をした友だちがいるということから、学童クラブに通う仲間という意識が子どもたちの間にもできています。指導員も、支援する側、される側でなく、仲間が悩んでいる、苦しんでいるということ、今も身近に感じています。



事例
2

「行くじゃん遊ぶじゃん保養キャンプ in 山梨」実行委員会

事務局長を務めた、小河原律香さんは、3.11を福島県で迎え、葛藤した末に故郷を離れ、札幌、そして甲府に移住されました。甲府で「いのち・むすびば〜放射能からいのちを守る山梨ネットワーク〜」を立ち上げ、早尾貴紀さんと一緒に保養・移住グループで活動する中で、おでかけプログラムが共催する保養キャンプに関わりました。



ー保養キャンプに関わるきっかけは？

小河原 子どもの健康を考え、2011年11月に甲府に移ってきました。今もなお、現在進行形で多くの子どもたちが放射能汚染地域で暮らし、健康不安の要素を蓄積させています。これを何とかしたいと考え、札幌に避難した時から保養の受け入れに関わりました。福島で相談会を開催してきましたが、被災地の状況やニーズは刻一刻と変わります。保養や移住、放射能のことは聞きたくないという時期もありましたが、夏休みや新年度が近づくとつれ保養を考える親たちが増えてきていました。

ー実行委員会が立ち上がったのはどのような経緯ですか？

小河原 甲府に避難してから娘の保育所の近くでみつけた

自然食品の八百屋&カフェ「ナチュラル工房」の土屋茂さんとの出会いがきっかけです。土屋さんは、大震災後に「自分にも何かできないか」と、もどかしい気持ちでいたそうです。山梨に子どもたちを招く保養キャンプなら地元で培ってきた人脈や知恵を活かして活動できると、実行委員会を立ち上げて仲間を募ってくれました。ただ、キャンプ経験がある実行委員はいましたが、保養キャンプはだれにとっても初めての経験でした。

ー参加者はどのように募集したのですか？

早尾 6月に福島県の二本松、伊達、白河、宮城県の白石で合同相談会を開催しました。

小河原 保養プログラムは飽和状態で、最初はなかなか埋まりませんでした。メーリングリストやWEBサイトで

募集して、最終的に子ども14名、大人2名の16名の参加がありました。なかには、自閉症ぎみのお子さんもいて、保養弱者にならないよう、受け入れることにしました。

ー保養キャンプとしてのこだわりや配慮はありましたか？

小河原 外に出ていない子どもたちが多く、体力が全国平均に比べて落ちていること、免疫力が低下していることを考慮して体調管理には万全を期しました。土屋さんの同級生の医師や元看護師による支援、臨床心理士からの助言をもらいながら運営しました。また、大学生のボランティアに関わってもらう

ことで、子どもたちとほぼ1対1の手厚さで見守ることができ、黄色いお揃いのTシャツを着て、どんな場所でも子どもたちが認識できる状態にして安全管理をしました。

早尾 食べ物については特に配慮し、汚染されていない食材を選び、手間暇をかけた料理を食べてもらいたいと考えました。地元のこだわり農家やお店に協力してもらい食材を調達しました。

小河原 調理は宿泊先近くの神社の厨房をかりて、私の友人たちが集まってお弁当や夕食を作ってくれました。私は、震災後1ヵ月だけ福島に戻って頑張ってみた時期があります。汚染されていない食材を探して料理すること、安心できるかどうかかわからないものを子どもに食べさせていることが、ともしんどかったです。だから、離れた時ぐらい安心して食べてもらうこと、それを親にも伝えることを大切にしました。

ー子どもたちの様子はいかがでしたか？

小河原 初日は、参加した子どもたちのやんちゃ度が、山梨に住むスタッフの子どもたちと違うことが気になりまし



た。それは、疲れている、大人に気を使っているように見えたが、帰る頃には普通の姿を垣間見ることができました。反省点としては、子どもたちがいいと感じる時と場所をもっと大事にしてあげたかった。決められたプログラムをまわすことで精一杯でしたが、子どもたちの様子を見て希望をかなえられるような柔軟な運営ができるといいと思います。

ー今後の展開について教えてください。

小河原 実行委員会では、甲府駅構内やさまざまな場所で有機野菜などを販売して資金集めをしています。そのことで関心を持つ人も広がっていきます。また活動の中に私たち当事者の視点が入ることで、ニーズをつかみやすい、やることがぶれないという面はあると思います。たとえば「保養」にこだわることも大事です。私たちも、ホームステイとして普段の生活へ受け入れる冬の保養プログラムに関わる予定です。



あそびプラスOne プログラム

◆岩手県 (12) ◆宮城県 (60) ◆福島県 (28) 合計100プログラム

団体名 アートリバイバルコネクション東北

東日本大震災を機に失われた文化・芸術に関するひと・まち・場の再生と、東北復興に向けた諸活動にアートを通じて寄与するため、宮城の舞台表現者たちが中心になって立ち上がった団体。

◆福島県	須賀川市	うつみね児童館	2012/08/03
◆福島県	福島市	Kid's プロ蓬萊	2012/08/07
◆福島県	福島市	Kid's プロ美郷	2012/08/08
◆岩手県	二戸郡	いわて子どもの森	2012/08/13

団体名 いわて子ども遊び隊

被災地の児童館を支援しようと岩手県社会福祉協議会児童館部会が中心となり、結成した団体。メンバーは児童厚生員、放課後児童クラブ指導員 (OB含め) などで、あそびを通して子どもたちを励まそうと活動中。

◆岩手県	宮古市	田老児童館	2012/03/07
◆岩手県	宮古市	田代児童館	2012/07/12

団体名 きんにく〜ず

仙台市内の児童館・児童センターの職員で結成している、「体を動かす遊びが大好き!!」な子どもたちでいっぱいな児童館をめざして毎日、運動あそびを本気で考え、本気で遊び、本気で楽しむグループ。

◆福島県	福島市	おかやま学童「どんぐり子」	2012/07/24
◆福島県	福島市	学童クラブ みなみのきょうだい	2012/07/31
◆福島県	伊達郡	桑折町児童館	2012/08/02
◆岩手県	盛岡市	城西児童センター	2012/08/03
◆福島県	福島市	かぜの子学童クラブ	2012/08/03
◆福島県	大沼郡	宮川児童クラブ	2012/08/24
◆福島県	相馬市	相馬市中央児童センター	2012/09/29
◆岩手県	九戸郡	どりーむ・キャンパス	2012/09/29

団体名 特定非営利活動法人 こどもの森ネットワーク

震災前の平成21年から、福島県内での幼児を中心とした子どもの外遊びの普及活動に取り組む団体。森の幼稚園など、子どもの自主性を尊重した四季の自然プログラムを独自に実践。

◆福島県	伊達郡	桑折町児童館	2012/04/05
◆福島県	伊達郡	はんだ子どもクラブ	2012/07/25
◆福島県	福島市	あおぞら学童クラブ	2012/08/01

団体名 特定非営利活動法人 コドモ・ワカモノまちing

感動・感性・感謝の心を育む「感育」を理念として、子ども・若者と一緒に豊かなまちをつくることを目的に活動している団体。若者100名以上のボランティアに支えられ、年間50〜100の事業を実施中。

◆宮城県	気仙沼市	古町児童館	2012/06/16
◆宮城県	白石市	白石市第一児童館	2012/07/31
◆宮城県	仙台市	川前児童館	2012/08/01
◆宮城県	仙台市	小松島児童館	2012/08/02

団体名 Seeds

震災後結成された、子どもたちの笑顔を少しでも増やしたいという願いを持った、東北で活躍するアーティストが集まった団体。主な提供可能プログラムは、プロアーティストとのお絵描き、キャンドル作り。

◆宮城県	名取市	下増田放課後児童クラブ	2012/07/09
◆宮城県	黒川郡	もみじが丘児童館	2012/07/20
◆宮城県	黒川郡	鶴巣児童館	2012/07/23
◆宮城県	仙台市	長町南児童館	2012/08/20
◆宮城県	仙台市	八乙女児童館	2012/08/24
◆宮城県	仙台市	上野山児童館	2012/09/24

団体名 食育NPO「おむすび」

「食育の基本は、家庭の食事作りから」を理念とし、料理教室などを通じて、分断されているつくる人(生産者)とたべる人(消費者)をつなぐことで、「食」の楽しさ大切さを伝えている団体。

◆宮城県	仙台市	荒巻マイスクール児童館	2012/02/25
◆宮城県	名取市	那智が丘児童センター	2012/08/02

団体名 特定非営利活動法人 スターパワー

「フィールドの外でも憧れの人になろう」をキャッチフレーズに、そうしたプロアスリートを一人でも多く誕生させるために活動しているNPO。スポーツを通じてのアスリートによる社会貢献活動を推進。

◆岩手県	釜石市	鶴住居児童館	2012/03/09
------	-----	--------	------------

団体名 津軽伝統金多豆蔵人形芝居

1907年頃(明治40年頃)創作され、約100年の間受け継がれてきた津軽伝統人形芝居「金多豆蔵」を上演する団体。金多と豆蔵が津軽弁で掛け合い、ふざけあったり、活躍したりする笑いに満ちた人形芝居を提供する。

◆岩手県	気仙郡	下有住児童館	2012/08/25
------	-----	--------	------------

団体名 てんたん人形劇場

宮城県を拠点に人形劇を中心に活動している団体。作りこみ過ぎない、それでいて想像力を刺激し、子どもも大人も楽しめるシンプルな人形劇を上演。

◆宮城県	仙台市	立町マイスクール児童館	2012/09/29
------	-----	-------------	------------

団体名 特定非営利活動法人 NICE (日本国際ワークキャンプセンター)

日本を中心に国際ワークキャンプという合宿型のボランティア活動を主催するNGO。日本で唯一、国連CCIVSに加盟し(現副代表)、世界で1・2を争うネットワークを持つ。現在、岩手県、福島県で長期の支援活動中。

◆岩手県	大船渡市	にこにこ浜っこクラブ	2012/08/01
◆福島県	福島市	たかくら家kid'sハウス	2012/08/22
◆宮城県	仙台市	郡山児童館	2012/09/12

団体名 ホゴノプロフィス

仙台を拠点にアートやパフォーマンスで楽しいまちづくりをする団体。国内外トップレベルのメンバーによるヨーヨーやジャグリングを使ったパフォーマンス活動を各地のイベントや児童館や子ども会など幅広い方に提供。

◆宮城県	気仙沼市	赤岩児童館	2012/04/21
◆宮城県	加美郡	中新田児童館	2012/05/05
◆宮城県	仙台市	燕沢児童館	2012/05/14
◆宮城県	仙台市	上野山児童館	2012/05/19
◆岩手県	盛岡市	大新児童館	2012/06/18
◆宮城県	仙台市	愛子児童館	2012/06/23
◆宮城県	仙台市	広瀬マイスクール児童館	2012/07/14
◆宮城県	仙台市	東中田児童館	2012/07/20
◆宮城県	名取市	増田児童センター	2012/07/21
◆宮城県	柴田郡	大河原児童センター	2012/07/26
◆宮城県	仙台市	西多賀児童館	2012/08/25
◆宮城県	名取市	相互台児童センター	2012/09/07
◆宮城県	黒川郡	宮床児童館	2012/09/22
◆宮城県	仙台市	人來田マイスクール児童館	2012/09/29

団体名 特定非営利活動法人 ホットとアートプレゼント

被災地支援で大好評のクラウンショー(マジック、ショートストーリーなど)を提供するチームスマイルデリバリーと、とびっきりの笑顔の時間を届けるホットとアートプレゼントによるパフォーマンスを提供する団体。

◆宮城県	仙台市	東四郎丸児童館	2012/03/10
◆宮城県	名取市	増田西児童センター	2012/05/08
◆宮城県	名取市	名取が丘児童センター	2012/05/09
◆宮城県	遠田郡	八雲児童館	2012/05/11
◆宮城県	名取市	ゆりが丘児童センター	2012/05/21
◆宮城県	気仙沼市	大島児童館	2012/05/26
◆宮城県	仙台市	榴岡児童館	2012/06/01
◆宮城県	仙台市	新田児童館	2012/06/02
◆宮城県	仙台市	袋原コミュニティ児童館	2012/06/19
◆福島県	須賀川市	若葉児童館	2012/07/20
◆宮城県	遠田郡	牛飼児童館	2012/08/02
◆宮城県	亘理郡	荒浜児童館	2012/08/25
◆宮城県	仙台市	蒲町児童館	2012/09/03
◆宮城県	角田市	北郷児童センター	2012/09/13



団体名 マメラポ。

大人と子どもと一緒に楽しめる音楽劇を上演する団体。劇団四季出身の実力俳優たちが、おはなし、歌、小道具、衣装など全てにアイデアを出し合い、手作りで作品を作る。

◆福島県	福島市	ハッピー学童クラブ	2012/08/06
◆福島県	福島市	吉井田学童クラブ	2012/08/07
◆福島県	いわき市	すずかけ学童クラブ	2012/08/17
◆福島県	福島市	南向台学童クラブくじら	2012/08/24
◆宮城県	仙台市	岩切児童館	2012/08/25
◆宮城県	仙台市	将監児童センター	2012/08/27

団体名 特定非営利活動法人 水守の郷・セケ宿

水源の役割と魅力を伝え、地域の自然と人を守り育てる事業を通じて、「水」でつながった地域の、持続可能な未来づくりに寄与することを目的に発足した団体。主な提供プログラムは、間伐材を使ったカストネット作り。

◆宮城県	仙台市	南中山児童センター	2012/05/21
◆宮城県	大崎市	鹿島台中央児童館	2012/06/23

団体名 宮城県ネイチャーゲーム協会

仙台を中心に、森や身近な公園でのネイチャーゲームを通じて、自然への気付きやふれあいを大切にして活動している、宮城県のネイチャーゲーム会員で組織している団体。

◆宮城県	気仙沼市	鮎立児童館	2012/03/10
◆宮城県	仙台市	遠見塚児童館	2012/05/16
◆福島県	須賀川市	ぼたん児童館	2012/08/22
◆宮城県	仙台市	住吉台児童センター	2012/08/22
◆宮城県	仙台市	鶴が丘児童センター	2012/09/15
◆宮城県	仙台市	南吉成児童館	2012/09/15
◆宮城県	仙台市	川平マイスクール児童館	2012/09/27
◆宮城県	仙台市	南光台児童館	2012/09/29

団体名 みやぎ子どもの文化を支援する会

被災地の子どもの心の糧となるように児童文化の面から支援活動を進めることを目指して11の団体が集ってできたグループ。おはなし会、人形劇、影絵など各団体の特技を活かしたプログラムを実施。

◆宮城県	角田市	横倉児童館	2012/05/29
◆宮城県	仙台市	市名坂児童館	2012/06/30
◆宮城県	仙台市	折立児童館	2012/07/06
◆宮城県	仙台市	宮城野児童館	2012/08/04
◆宮城県	柴田郡	村田児童学級	2012/08/09
◆宮城県	柴田郡	槻木児童館	2012/08/18
◆宮城県	白石市	白石市第二児童館	2012/08/23

団体名 特定非営利活動法人 みやぎ・せんだい子どもの丘

子どもと子どもにかかわる大人に対して、社会体験・自然体験など多様な体験をする様々なプログラムを提供することで、子育て支援などに配慮した形で地域全体での健全育成に寄与することを目的とした団体。

◆宮城県	塩竈市	藤倉児童館	2012/07/26
------	-----	-------	------------

団体名 特定非営利活動法人 盛岡ボードゲームクラブ

ボードゲームを持ち込み、子どもたちが遊ぶゲームについてルールの説明やアドバイスを行なうゲーム会を提供する団体。優れたボードゲームの紹介や普及・振興を行ない、年齢、性別、文化に関係なく人々がふれあう場を創出。

◆岩手県	九戸郡	城内地区児童クラブ	2012/08/17
------	-----	-----------	------------

団体名 特定非営利活動法人 夢ネットワーク

読書推進事業と図書館(図書室)活動支援事業を通じて、地域住民の文化情報活動への幅広い積極的参画を促し、地域の文化情報活動活発化に寄与することを目的とする。

◆福島県	伊達市	霊山児童館	2012/06/16
------	-----	-------	------------

団体名 理科教育研究フォーラム

2006年から活動する、教育委員会、学校、PTA、科学館、公民館などの依頼を受け、年間50クラス以上の理科実験授業を行なう任意団体。松延代表は、テレビ番組の講師や理科問題監修を務める。

◆岩手県	盛岡市	仙北児童センター	2012/07/13
◆福島県	いわき市	セリオス遊学館	2012/07/23
◆岩手県	盛岡市	厨川児童センター	2012/07/31
◆宮城県	黒川郡	吉岡児童館	2012/08/02
◆福島県	いわき市	平四小児童クラブ	2012/08/07
◆福島県	福島市	しんはま学童クラブ	2012/08/10
◆福島県	いわき市	ピーターパンチャイルドクラブ	2012/08/17
◆福島県	福島市	渡利児童センター	2012/08/22
◆福島県	福島市	平野学童保育ひまわり教室	2012/08/23
◆福島県	福島市	大笹生学童クラブ	2012/09/10
◆福島県	福島市	にわか学童クラブ	2012/09/11





認定特定非営利活動法人 日本NPOセンター

〒100-0004 東京都千代田区大手町 2-2-1 新大手町ビル 245

Japan NPO Center

Shin-Ohtemachi Bldg #245

2-2-1 Ohtemachi, Chiyoda-ku Tokyo 100-0004, Japan

TEL 03-3510-0855 FAX 03-3510-0856

Email jncenter@jnpoc.ne.jp

URL <http://www.jnpoc.ne.jp/>

Twitter [jnpoc](#)

編集・発行：認定特定非営利活動法人 日本 NPO センター

制 作：一般社団法人 経団連事業サービス

